



～清掃センターだより～ 皆さまからよくあるごみについての 質問に回答します



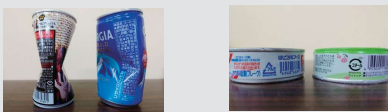
テレビは月2回あるリサイクル分別収集に出してもいいですか？

エアコン（室外機含む）、テレビ、冷蔵庫（冷凍庫・保冷庫含む）、洗濯機、衣類乾燥機は家電リサイクル法の対象の機器に該当しますのでリサイクル分別収集で回収はしません。
原則として購入した店、買い替える店で引き取ります。買った店がわからない等の場合、清掃センターでも引き取れますが、家電リサイクル券（郵便局で購入）と送料が必要になります。
※家庭用製品であっても事業で使用していたものは、産業廃棄物扱いになりますので引取りできません。



手でつぶれる柔らかい缶はアルミ缶で捨ててもいいでしょうか？

手で簡単につぶれることも一つの判断基準ですが、最近では環境への配慮のため原料の使用量削減と製造時のCO2削減を目的に軽量のスチール缶が出てきています。排出する際は似ているものでもしっかりとアルミ、スチールのマークを確認し、排出するようお願いいたします。



清掃センターで働く現場職員の声を聞いてみました



環境対策課清掃センター 土屋 貞雄 業務士

Q. 業務を行う上でのやりがい又は苦労することは？

A. 清掃センターには多くのごみが持ち込まれ、持ち込まれるごみも様々です。正しい分別を行わないと思わぬ事故やケガにつながるため、常に注意を払い安全を保てるよう心がけています。

問合せ先 環境対策課清掃センター ☎06686

Q. 清掃センターではどのような業務を行っていますか？

A. 場内ではごみの搬入受付や分別、処理業務、計量などを行っています。

Q. 市民の皆さんに伝えたいこと、お願いしたいことはありますか？

A. ごみはちょっとした工夫で減らすことができます。長く物を使う、生ごみの水を切るなど今すぐにもできることがたくさんあり、節約にもつながります。今一度ごみの捨て方を見直し、下田市のごみ減量化にご協力をお願いします。

南伊豆地域広域ごみ処理事業について

問合せ先 環境対策課施設整備係 ☎06686

先月号に引き続き、皆さまから寄せられたご意見をご紹介します。今回は、整備を予定する施設に関する疑問や質問について取り上げます。



広域ごみ処理事業 QR



どのような施設を整備する予定でしょうか？

可燃ごみを処理するための焼却施設（処理能力：58トン/日）と不燃ごみを処理するための資源化施設（処理能力：4.8トン/日）の整備を予定しています。



施設の処理能力（規模）はどのようにして決まるのでしょうか？

処理能力は、施設稼働後における最もごみ量の多い年を基準に計算されます。予測された年間ごみ量（計画ごみ量）を施設の稼働日数で割り戻すことによって算出しますが、焼却施設については災害ごみへの備えとして一定の割合を、資源化施設については時期によるごみ量の変動に対応した一定の割合を見込んでいます。

○焼却施設（既存施設と同じ運転方式の場合）

$$\frac{\text{計画ごみ量}}{13,966\text{t}} \div \frac{\text{年間稼働日数}}{253\text{日}} + \frac{\text{災害ごみ}}{5\%} \div \frac{\text{施設規模}}{58\text{t/日}}$$

○資源化施設

$$\frac{\text{計画ごみ量}}{1,056\text{t}} \div \frac{\text{年間稼働日数}}{253\text{日}} \times \frac{\text{変動係数}}{1.15} \div \frac{\text{施設規模}}{4.8\text{t/日}}$$

※静岡県の地震被害想定（起きる可能性が比較的高いレベル1）では、1市3町の災害廃棄物発生量を12万トンと想定しています。施設規模に災害ごみを見込まない場合は、処理が遅れ、仮置場に長く置かれたままになってしまうおそれがあります。

※年間稼働日数は、施設の休止日や点検補修に要する日数を考慮したものです。



燃やさない処理方式もあると聞きました。なぜ焼却方式を採用するのでしょうか？

ごみ処理施設は住民生活に必要な不可欠な施設であり、故障しにくいこと、安定した運転が可能であることなど、様々な要件が求められます。

広域処理に向けた基本構想を策定するにあたり、ごみ由来のエネルギーを回収できること、災害廃棄物の処理が可能であることなど、4つの条件を設定し、複数の処理方式の検討を行ったところ、焼却方式が最も整備方針に合う結果となりました。

今回採用する焼却方式（ストーカ式）は、高温でごみを燃焼することによって、無害化、安定化、減容化を同時に達成できる処理方式で、処理の安定性に優れ、運転管理も容易であることから、近年のほとんどのごみ処理施設で採用されるなど、最も実績がある処理方式です。

令和2年度に燃やさない処理方式であるトンネルコンポスト方式（ごみを固形燃料化する方式）の検討も行いましたが、出来上がった固形燃料の長期的かつ安定的な引取先の確保が困難であること、災害廃棄物の処理ができないことなどの課題があり、導入を断念した経過があります。

